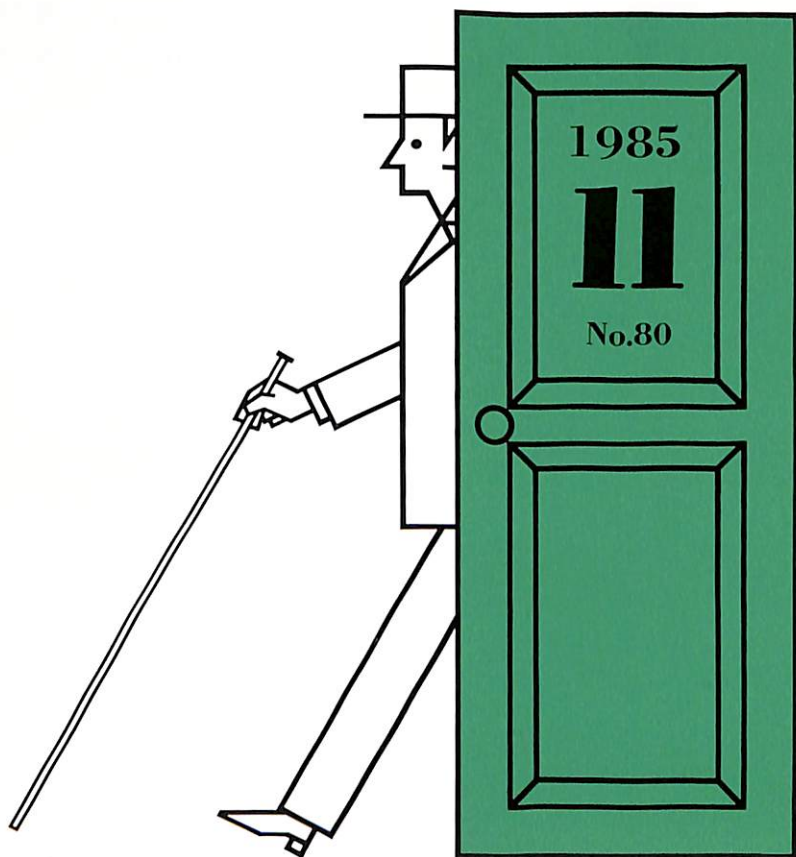


視覚 障害

その研究と情報

特集＊秋・スポーツ



ISSN 0385-7476
SSK

●戦争とはなんだったのか——戦後40年、いま、問いたですとき

戦争責任

家永三郎著

B 6判上製・カバー・四二四頁 定価一八〇〇円

一九四五年八月十五日、第二次世界大戦は日本の全面敗北で終った。だが日本では、自らの手で戦争責任を追及することなく、戦後を享受してきた。本書は、一九三一年（満州事変）からの十五年戦争における主として日本の、また連合国の戦争責任について、惨禍の実態を示す史実と理論の両面から、その全体像をはじめて体系化したものである。

宮田光雄著

いま日本人であること

B 6判並製・カバー・二九二頁 定価一五〇〇円

精神の貧困、創造力を破壊する教育、そして核による人類絶滅の脅威——高度産業社会が映し出す快適な私生活というみせかけの平和の底にひそむ影を凝視して、著者は問う。いま日本人であるとはどういうことか、教育・生き方の変革が体制をどう揺がすか、戦後を原理としてどうとらえるか。

ヨシコウチダ著／波多野和夫訳

荒野に追われた人々

B 6判上製・カバー・三〇八頁 定価二二〇〇円

戦時下日系米人家族の記録——一九四二年の春、パークレー在住のある日系米人家族に突如苛酷な運命が襲う。大統領令により西海岸の日系人十二万人が収容所に隔離されたのだ。人種的偏見と市民権侵害の狂気を生み出す戦争とは何か。体験にたった問いかけは、読む者の心を打ってやまない。

しっかりと母さんと ぐつたら息子の 人生論

沢村貞子
植木 等 対談

〈岩波ブックレット47〉 A 5判並製・六四頁 定価二五〇円

「世の中、変りましたねえ」「現金取引じゃなきゃ駄目になってきたのかな」「けじめをつけるっていうか、そこいらが……」「おたがいさまっていう気持が、だいじよね」痛罵あり、笑いあり。現代人が失っているものは何かについて、語り合う。

岩波書店



東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
振替番号 東京6-26240 千101

目 次

1985年 11月 №80

2 ページ評論	藤原進一郎	2
---------	-------	---

特集 秋・スポーツ

楽しもう盲人球技	原田 清生	5
私と野球	酒井 邦夫	13
自然との触れ合い—山—	望月美紀子	18
柔道との出会い	加藤 則夫	23
日本盲人卓球センターへの夢	茂木 幹央	27
水着になって解放感を	矢野 圭子	30
地にはい、そして地を走れ	白岩 康平	34

ボランティア西・東

新聞をお読みします——電電ゆいの会の電話サービス——	39
----------------------------	----

この人と語る

点字図書館の抱えている問題点

岩山 光男・西尾 正二	42
-------------	----

インフォメーション・コーナー	58
----------------	----

日本盲人福祉研究会研究費助成制度規定	71
--------------------	----

編集後記	74
------	----



みんなで親しむスポーツ

大阪市身体障害者スポーツセンター指導課長 藤原 進一郎

近年、運動不足の弊害が、今や単なる体力の低下だけではなく、高血圧・心臓病といった循環器系の疾患や、糖尿病などのいわゆる文明病の根源といわれ、その解消にスポーツの振興が叫ばれている。ましてや、目の不自由な人たちにとっては運動不足は著しく、健常者以上にスポーツの振興につとめなければならないといえる。

身体障害者固有のスポーツがあるとは考えない

「身障スポーツ」とか「盲人スポーツ」ということばをよく耳にする。こうしたことばの使い方が、案外障害をもたない人たちに、自分たちとは別のスポーツ、別の人たちのスポーツという印象を与えていないだろうか。元来スポーツはみんなで行うもの、障害の有無、軽重や違いなどをこえて一緒に親しむものだと思う。

たしかに、盲人卓球のように、ボールをころがして行うものが卓球といえるだろうかという疑問は当然だと思う。卓球は、テニスやバレーボールと同様に、ネットを隔てて行う防禦型（味方の失点が相手の得点となる）の球技である。しかし、視覚障害をもつ人に、空間を飛んできて、いきなりコートに接触した音だけを頼りに返球せよということは、非常に困難なことであり、例えば大きなラケットを使用したとしても、競技として発展性があるとは考えられない。最初に盲人卓球を考案した人の発想は定かでないが、おそらく感覚訓練として取入れられ、それが次第にスポーツとして発展してきたと考えられる。しかし、無から考案されたものではなく、卓球からの変化であろう。

このように、見えなくて空間を飛んできたボールが打ちにくいことから考えられた盲人卓球は、脳性マヒなどで、同じように打ちに

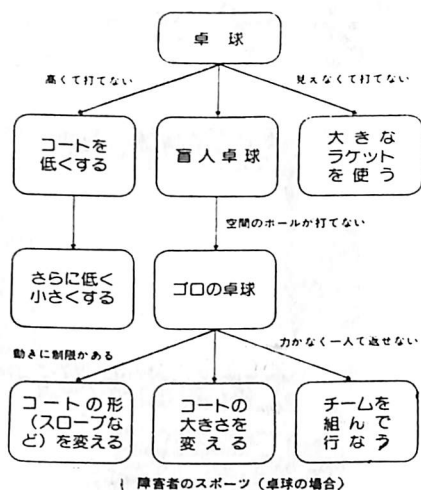
くい人たちにとって、「ゴロの卓球」というアイデアを提供してくれた。さらに棒（フレーム）1本の置き方で、コートの大きさを変えることができる。このフレームを障害に合せて置くことによって、より多くの人たちと一緒に卓球が楽しめるようになる。また、どうしてもラケットが握れなければ素手のままで、あるいは口で吹いても卓球といえよう。筋ジスなどの人で、一人では相手コートにボール

を返すことができなければ、チームを組んで、バレーボールのように3回以内に相手コートを攻めるのも卓球といってよいのではないか。このような卓球ならば、全盲の人がメンバーに入ることすら可能と思う。

このように、できないところを工夫して行っているのが「障害者のスポーツ」であり、他の障害の人はもちろんのこと、障害をもたない子供たちやお年寄にも適したスポーツとなっている。

誰にもできないことはある

近年のめざましい振興に伴って、スポーツによる障害や事故の増加も忘れることができない。「障害に負けるな！」の心意気は心強い限りであるが、障害をもっているという厳然たる事実も忘れることはできない。スポーツに親しむと、自分の限界に挑戦してみようという気持ちを抱きはじめるのは自然である。何のためにという目的をしっかりと持ち、どんな内容のトレーニングをどのような方法でするかをしっかりと確かめながら頑張りたいものである。年を取って弱気になったといわれても「できないこと」は誰にでもあることを認めたい。



立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みにになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

編集後記

在学中はともかく、社会に出てしまうと、ほとんどの視覚障害者はスポーツから遠のいてしまうと言われます。地域社会の中で、手軽でそして盲人に適したスポーツがなかなか見つけにくいというのが原因のようです。確かに、大阪の身障スポーツ・センターのような所が地域社会にあれば気軽にでかけていくこともできます。しかし、そのような施設は東京でさえ、小規模なものが1カ所しかありません。何時間もかけて、スポーツをしに行く気にはなれません。結局住んでいる地域で、自分に適したものを捜すほかにないように思います。特別な盲人用の競技を除いて、本号の特集でスポーツを楽しんでおられる皆さんもそれを実践しているのではないのでしょうか。

このほかにも、ジョギング、ボウリング、魚釣り、身障スポーツ大会の各種目、もっと原始的なものでは縄飛びなどで体力増進を心がけている視覚障害者もたくさんいます。お互いに健康を大切にしたいものです。

(田中 徹二)

視 覚 障 害	1985年11月 No80
年間購読料	3,000円 (送料とも)
発行日	1985年11月1日
編集人	(連絡先)
日 本 盲 人 福 祉 研 究 会	
〒160 東京都新宿区高田馬場1丁目 日本点字図書館内 23番4号	
電話 (03) 200-1130	
振替口座 東京 6-16103	
発行人	身体障害者団体定期刊行物協会
〒157 東京世田谷区砧6-26-21	
印刷所	合同印刷株式会社
〒130 東京都墨田区業平2-9-13	
電 話 (624) 6111 (代表)	

協賛団体 日本点字図書館